

地方再生戦略に作用する 人事改革のインパクト

～企業人事の地殻変動は地方に何をもたらすのか～

第10回

日本を，地方を救う人材に必要な力

(有志縁塾 代表取締役 大谷由里子)

「グローバル人材を育成したい」
「ダイバーシティの研修をしてほしい」

「自立した人間になってほしい」
“人材育成”に取り組んでいる私たちのところには企業からのそんなオファーが多い。でも、「はい、分かりました」と、そんなに簡単に人材を作れるはずはない。世界中の人を認めることができ、すべての人を思いやれて、自分で考えて行動できる人。そんな人が簡単に作れて、世界中、そんな人で溢れていたなら、世界も、日本も、地方も、もっともっと良くなっていくはずである。何より、私たちの仕事なんていらぬ。人づくりがうまくいかないから私たちの仕事があって、私たち講師も勉強する余地がある。

20年以上にわたって人づくりに関わってきた立場からすると、いちばん大切なのは「人と向き合う力」だと今はっきり言える。人と向き合うから他人のことが分かる。自分と向き合うから成長できる。私は、そう信じている。

そんなことを教えてくれたのが、私が主宰する「リーダーズカレッジ」のメンバーたちだ。

阪神淡路大震災で ようやく分かったこと

私自身は22歳から25歳まで吉本興業で働いた後、結婚退社して27歳のときに起業した。吉本興業からも仕事をもらい、顧客にも恵まれた。ところが、すべての社員に自分の分身として動いてもらいたかった私は、部下の育成に大きくつまづいていた。

「なんでできないの！」

「どうして分からないの！」

と、部下を怒ってばかり。そんな社長に部下が付いてくるはずもなく、いつもイライラしていた。それでも、そのときの私は、“自分が悪い”なんて少しも思っていなかった。

「私は、こんなに必死にやっているのに」と、力みがちであった。ちょうどそんなときに襲ってきたのが阪神淡路大震災（1995年1月17日）だ。大震災を契機に一気に売り上げをなくし、それまで良好な関係を築いていたお客さんとも連絡がつかなくなった。その日を境に世界観、価値観がガラリと変わった気がした。“今日は明日を保証しない”“昨日は今日を

保証しない”と心底実感した。関西を拠点にしていたこともあり、神戸の惨状を目の当たりにしたときのショックは大きく、私はそのとき初めて自分と向き合った。

「今日、死んでも納得できる生き方って何だろう」

「私は、どんな人生を送って、何をこの世に残したいのだろうか」

考えて、考えて、考えて、辿り着いたのが、「こころの元気」というキーワードだった。自分の心が元気じゃないのに、本気で人の面倒なんて見られるはずもない。自分の心が元気じゃないのに本気で会社のことや地域のことや国のことなんて考えられないだろう、とそんな思いを確信したのである。

“向き合う力”を養う プログラムを実践

自分と向き合える人間、人と向き合える人間を育成したくて、まず、大阪で立ち上げたのが「リーダーズカレッジ」だった。ビジネスマン、OL、経営者、士業、仕事も年齢も関係ない。みんなで作り出す楽しさ、難しさを感じてもらおうという趣旨の“おとなの私塾”である。

1年間のカリキュラムの前半は、みんなで新喜劇を作ってもらうことにした。つまり、人間関係はできていないけれど、ゴールは明確であり、その過程で人間関係



■大谷由里子：京都ノートルダム女子大学を卒業後、吉本興業に入社。故・横山やすし氏のマネージャーを務め、宮川大助・花子、若井こずえ・みどりなどを売りだし注目を集める。2003年、研修会社の志縁塾を設立。「笑い」を取り入れた「人材育成研修」は、NHKスペシャルなど多くのメディアで話題となっている。現在は、年間300を超える講演・研修をプロデュース中。

●URL <http://www.shienjuku.com/>

を構築してもらおう狙いのプログラムだ。しかし、事件は現場で起きる。やる気のない人間を盛り上げたり、途中から来なくなった人間をフォローしたり。めんどくさいことを解決する楽しさや達成感を感じてもらおう。

カリキュラムの後半は、人間関係はできているけれど、ゴールが無い状況で、自分たちでやりたいことを形にするという課題に挑む。その活動体験を通して、いろんな人を認める、いろんな価値観を認め合う、いろんな人と会話することの意味が自ずと学べるプログラムになっている。

およそ20年続けてきた「リーダーズカレッジ」で、実は私自身がたくさんのことを学ばせてもらった。20年前に立ち上げたときには、ほとんどのメンバーは、携帯電話なんて持っていなかった。携帯メールなんかもなかった。

「これから、必要だよ」などと私が言っても、メンバーは誰もそう思っていなかった。そんな彼らに、私は人よりも一歩先に行く楽しさを伝えてきた。ところが、今は、全く違う。こちらが、カレッジのメンバーたちに教えるを乞う立場に逆転している。

「それなら、LINEでグループにしたほうがいいですよ」

20代のメンバーに言われて、「どうしたらいいの？ うまく、ダウンロードできない」などなど、

必死で私が教えてもらう。それどころか、「今、どんなテレビが流れているの？」「どんなところに遊びに行くの？」と、若い彼らに尋ねて情報をいっぱいもらっているのだ。

いざというとき、率先して行動できる力の源泉とは？

20年を振り返ってみれば、最初の頃のメンバーには、その後起業した人、上場企業の取締役になった人、海外で活躍している人のほか、社長、政治家、コンサルタントなど多種多様な人材が巣立っている。農業に打ち込んでいる人、漁業に携わっている人もいる。本当にありがたいことに頼めば、後輩のためにいろんな世界の話をしにきてくれる。何よりも、私自身が彼らにいろんな業界のことを教えてもらって、勉強させてもらっている。そして、その人脈を活かして、地方や企業の人材育成のお手伝いをさせてもらっている。

熊本の菊池の商工会もその1つだった。商工会で予算をもらって、2年間、ここの地域に入り込んで、自分たちで仕掛けられる人づくりをした。そのうちの1つが、「菊池村」というインターネットのサイト。商工会のメンバーの1人だった渡辺酒店の渡辺君が、「菊池の農家を応援したい」と立ち上げた。今では、年間2億円を売り上げる。

商工会青年部の会長だった寿司屋の息子の梅田君は、ホルモン屋さんを経営。熊本地震のときには、真っ先に阿蘇からの被災者のために店を解放した。私やリーダーズカレッジのメンバーがそこに寄付金や救援物資を集め、梅田君は、それを益城などの被災者に届けてくれた。こうしたボランティア活動などに象徴される、自分で考え行動する力はどこで生み出されるのだろうか？

「何ができるかなあ……と、自分と向かい合うと自分ができることが見えてくる。大谷さんに教わったことやん！」

——実はみんながそう言ってくれる。涙が出るくらいにうれしい。きちんと自分と向き合って、人と向き合うことができれば、「つらい」も言える。「助けて」も言える。人の気持ちも分かるし、人の巻き込み方も分かる。

本物の人材育成には何年もかかる覚悟を

「自分と向き合う力、人と向き合う力が大事」——このように言うのは簡単だけれど、その意味を身体感覚で理解して、必要なときに実際に考え、行動できるようになるまでには何年もかかる。けれど、私は「彼らが日本を救ってくれる、地域を元気にしてくれる」と信じている。